

1 疫病

A 生態と防除のねらい

- 1 病種いもや、ほ場に放置されたり病屑いもなどは伝染源になるので、健全な種いもを用いるとともに、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 2 17～20℃ぐらいの比較的低温で多湿の時に発生しやすい。春作では、早い年は4月下旬頃から発生し始め、雨天が多いとまん延が著しい。秋作では比較的少ないが、10～11月頃発生する。発生を認めてからの薬剤散布は効果が十分でないので、発病期には予防散布に努める。

B 耕種的防除法等

- 1 常発地では耐病性の強い品種を栽培する。
- 2 感染防止のため、塊茎の収穫は、天気の良いときに掘取り、土を良く乾かしてから貯蔵庫へ収納する。

2 そうか病

A 生態と防除のねらい

- 1 土壌伝染と種子伝染により感染発病する。土壌のpHが5以上のところで発生しやすく、石灰や堆肥を多く施用すると発病を助長する。塊茎肥大始期以降の感染時期に土壌水分が60%程度になると、ほとんど発病しない。
- 2 クロルピクリン剤の土壌消毒も有効であるが、効果があがらない場合も多いので、種いも消毒の励行とともに、耕種的な防除に重点をおく。

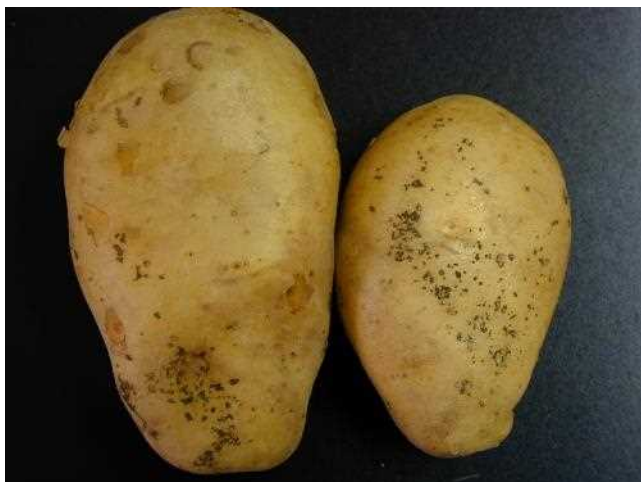
B 耕種的防除法等

- 1 土壌を酸性に保ち、酸性肥料を用いることによって発生を軽減することができる。この場合土壌のpHが5を超えないことが望ましい。
- 2 塊茎肥大始期以降に散水を行い土壌水分を高める。
- 3 検疫済の種いもを選び、発病ほ場では連作を避ける。
- 4 常発地では耐病性の強い品種を栽培する。

3 黒あざ病

A 生態と防除のねらい

- 1 春と秋の2回発生するが、春作のトンネル栽培で被害が大きい。
- 2 種いもと土壌により伝染するが、種いもによる伝染が強いので、種いもに土粒またはタール状の菌核が着生していないものを用い、種いも消毒を行う。
- 3 一般に多湿の酸性土壌において発病が多いので、発病ほ場では排水を良くして過湿を避ける。



B 耕種的防除法等

- 1 検疫済の種いもを選ぶ。
- 2 幼芽の被害を避けるためあまり深植えしない。
- 3 多発生ほ場では、土壌の酸性を矯正する。

4 輪腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は、種いもにより伝染するが、り病種いもを切断した刃物でも伝染するので、無病いもを選ぶとともに、種いもの切断刀は消毒しながら行う。
- 2 発病株は抜き取り処分する。掘り残しのり病いもは農機具による接触伝播につながるのので、除去に努める。

B 耕種的防除法等

- 1 健全な種いもを選ぶ。
- 2 種いもの切断に際しては、切断刀を交互に使い、その間熱湯に数秒間ほどつけ消毒しながら使う。
- 3 発病株は直ちに抜き取る。

5 青枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は、土壌中で長期間生存し、土壌伝染を主体とするが、り病種いもによる伝染もする。
本病原菌は、バレイショの他トマト、ナス、ピーマン、タバコ、イチゴなど多数の作物を侵すので、バレイショを初めて栽培するほ場でも注意が必要である。
- 2 健全な種いもを用いるとともに多湿土壌での発生が多いので、ほ場の排水を良くする。また、ネコブセンチュウの加害が本病を助長するので防除を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 健全な種いもを選ぶ。
- 2 ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
- 3 秋作の場合、高温期を避け、できるだけ遅植えにする。
- 4 発病株は抜き取って処分する。

6 ウイルス病

A 生態と防除のねらい

- 1 バレイショのウイルス病には数種あり、伝染方法も異なるが、防除の要点は、発病株の早期抜き取りとアブラムシ防除の徹底にある。病原ウイルスと伝染方法は表のとおりである。
- 2 PVY-エネソ系統は、タバコ黄斑えそ病の病原ウイルスでもあるので、タバコの隣接地では注意する。

バレイショ主要病原ウイルスと伝染方法

病名	病原ウイルス	伝染方法			
		種いも	汁液	土壌	アブラムシ
葉巻病	ジャガイモ葉巻ウイルス (PLRV)	○	×	×	○
Yモザイク病	ジャガイモYウイルス (PVY)	○	○	×	○
Xモザイク病	ジャガイモXウイルス (PVX)	○	○	×	×
キャリコ病	アルファルファモザイクウイルス (AMV)	○	○	×	○
モザイク病	キュウリモザイクウイルス (CMV)	△	○	×	○



B 耕種的防除法等

- 1 検疫済の種いもを用いる。
- 2 発病株は、早期に抜き取る。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

媒介虫の防除（ナス科虫害の項を参照）

PLRV、PVY、AMV、CMV：アブラムシ類の防除を行う。